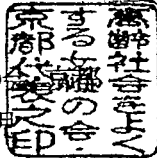


2008年7月22日

厚生労働省
老人保健課長 鈴木 康裕 様

高齢社会をよくする女性の会
代表 松島慈児
604-0024 京都市中京区下妙覚寺町185-804
電話 075-211-6628 FAX 075-253-1861



2009年介護保険法の改定に向けての意見書

今般、財務省から提示された介護保険の改定案は、介護保険法の理念に反するものが多々あると思いますので、以下のとおり意見書を提出いたします。

1 「高齢者介護実態調査」の対象者について

在宅と施設ではソフト面、ハード面共に格段の差があるのだから、在宅(約1000人)とグループホーム(全国35~50施設)の調査・分析を速やかに行い、結果を反映させること。

2 要支援1~要介護2を、介護保険の対象から除外する件について

要支援1~要介護2を、介護保険の対象から除外すれば、介護予防の視点から一番必要な人を排除し、重度化への進行を促進する心配がある。
それは介護保険法第2条に違反する、重大な改定案である。

3 要介護認定における1次判定の調査項目から23項目を削除予定の件

削除予定の23項目には、認知症の判定に必要なものが多数含まれている。認知症介護に関しては初期の混乱期こそ重要な介護予防期なのだから、23項目を外すことは許されない。

4 介護認定調査検討会委員について

介護認定調査検討会委員に、介護現場のスタッフ並びに在宅介護者を加えること。実態を把握しない状態で安易に認定項目の検討をしないでいただきたい。

5 制度の改定は慎重に

「同居家族」の定義が保険者によって、格差がある現状だ。

この定義について2007.12に条件の緩和が「事務連絡」でなされたが、これは「通達」と違い、強制力を持たない。従って利用者、ケアマネに有効に徹底されていない。

また、「福祉用具のレンタル」についても、2006.10改定し、軽度者へのレンタルが削除されたが、2007.4には、部分的な緩和策が出された。

「同居家族」の取り扱い、「福祉用具のレンタル」など利用者にとって生活の重要かつ基本的なサービスを左右する事柄を「朝令暮改」で扱わないでほしい。

認定調査項目削減についての意見

厚生労働省老健局老人保健課 御中

2008年7月23日 (社) 認知症の人と家族



- 1 「家族の会」総会アピールにおいて、項目削減に危惧を表明したのは、「家族の会の提言」の具体的改善提案で「認知症があると認められる場合には『要介護1』以上になる認定システムに改善する」と求めていることに逆行するのではないかと思料したからです。

- 2 現行の要介護認定システムは認知症を正確に判定しない、ということは多くの家族が経験していることであり、私たちはその改善策として、①一次判定の樹形図の改善 ②調査員及び意見書を記載する医師の認知症の理解 ③介護認定審査会での認定調査票特記事項、認知症高齢者の日常生活自立度を重視した審査の実施、が必要と考えています。

- 3 今回削除されようとしている項目が、判定に影響しない場合があること、却って逆の結果を招く場合があることも承知していますが、しかし、単純に削除するのみでは私たちが望む認定システムの改善にはならないと考えます。

- 4 要介護認定調査検討会が、「認知症は要介護1以上」との基本姿勢を持って、前述した改善策を併せて実施したうえで今回の項目削除を検討していただいているのであれば、私たちは信頼してお任せするものです。
しかし、現状ではそのようには理解できず、検討されている項目削除が実行されれば、現状でも適正に判定されない認知症の認定が、さらに不利にならざるを得ないと考えます。

- 5 以上のことから、「現在候補に挙がっている項目の内、何を残してほしいか」と問われれば、現状においては、「第7群問題行動について」の項目はすべて残していただくことを要望します。そして、認知症と診断されかつ「自立度Ⅱa」以上の場合は必ず要介護1以上の認定が行われるようにしていただきたい。
そもそも、「第7群」は認知症の状態を把握するために大切な項目であり、この項目が存在することによって、調査員は認知症の症状の有無に注目し特記事項を記載することができ、審査会の場では一次判定の不備を補い認知症の状態把握と介護の困難さを判断することに役立つものだと考えます。 以上

要介護認定調査第2次モデル事業の削除候補項目についての意見

2008年8月8日

市民福祉情報オフィス・ハスカップ 小竹雅子

厚生労働省では要介護認定の2009年度改定に向けて要介護認定調査検討会を開き、現行の認定システムの改定を検討しています。

介護保険法施行当初、要介護認定の一次判定項目が施設利用者を対象とする「高齢者介護実態調査」にもとづき設計されたことについては、在宅利用者のデータがないためとの説明を受けました。しかし、制度がスタートして8年を過ぎた現在、在宅サービス利用者が7割を占めるにも関わらず、施設利用者の調査が基本とされていることに大きな疑問を抱いています。

また、要介護認定調査検討会における専門的な議論のなかでは、「要介護認定等に影響すると考えられる」110項目を追加しながら、最終的には「回答結果に著しい偏りが出る」との理由で、現行82項目を65項目に削減して「第2次モデル事業」を行うことが決定された経過（注1）については、被保険者、利用者市民に理解することができるような説明はありません。そして、削除候補項目については介護保険の現場に関わる方たちから、23項目の削除により、これまで以上に認定が軽くなる可能性が高いこと、特に認知症関連の項目も多いため、認知症高齢者の認定が軽くなるのが心配されています。加えて、削除された項目については認定調査員が特記事項に記入できなくなる、あるいは認定後のケアマネジメントにも支障が出るのが指摘されています。

しかし、2008年の通常国会では、「要介護状態区分が極端に重度又は軽度に判定されることはないものと考えており」との首相答弁（注2）があり、“極端”ではない認定ランクの変動があることが予測されます。

市民福祉情報オフィス・ハスカップが6月2日に開催した国会集会では、厚生労働省老健局老人保健課から認定調査員と介護認定審査会の作業負担の軽減が主目的であるとのこと説明をいただきました。しかし、「利用者本位」を原則とする介護保険法に照らすならば、関係者の負担軽減より高齢者市民の利益が優先されるものと考えます。

今回、市民福祉情報オフィス・ハスカップでは、特に在宅介護の現場に関わるみなさんから23削除候補項目についてご意見を集めました。それぞれの現場経験から意見が分かれる項目もありますが、特に全員が必要としている項目にご注目いただき、削除候補項目の再検討にご活用いただけることを願っています。

注1 要介護認定調査検討会における一次判定項目の検討経過

2007年2月

現行82項目に110項目を追加し「高齢者介護実態調査」（対象は介護保険施設約60施設、入所者4500人程度）を実施（費用2億55万円 みずほ情報総研株式会社に調査委託）

2007年11月

「高齢者介護実態調査」の結果をもとに、110項目のうち6項目を追加（104項目は削除）して、

「第1次モデル事業」(対象 129 市区町村)を実施(費用 1,848 万 5000 円)

2008 年5月

「第1次モデル事業」(262 市町村、3万 4,401 件)の結果をもとに、「第2次モデル事業」における 23 削除項目を決定(第2次モデル事業予算額6億 5,286 万 9,000 円)

注2 要介護認定に関する質問主意書(三井辨雄・衆議院議員、2008 年5月 22 日提出)

に対する答弁書(内閣総理大臣・福田康夫、2008 年5月 30 日送付)抜粋

「23 項目を削除した場合と残した場合とを比較すると、介護に要する時間の推測値に大きな違いはなく、要介護状態区分が極端に重度又は軽度に判定されることはないものと考えており、第2次モデル事業の結果、御指摘のような場合が生じたとしても、それは要介護状態等の判定方法が不適切な結果であるとは考えられず、現段階で判定方法についての検討を行うことは考えていない。」

I 削除候補項目の要・不要とその理由

1.拘縮(肘関節)

[項目は必要である]

- ・拘縮(肘関節)の有無により、起居動作など生活全般に影響がある。
- ・食事が自立できるかどうかを測る項目であり、食事の確保は基本的な介護である。
- ・食事摂取、着脱に大きく影響があり介護量がわかる項目である。
- ・過去の改定により「片手胸元持ち上げ」が廃止され、上肢の可動域を表す調査項目は本項目と同拘縮調査項目の肩関節しか現存しない。推計ケア時間に対しての寄与率は低いかもしれないが、上下肢の可動域を視るということは調査対象者の全身状態を捕まえることにつながり、ケアプラン作成上の情報としても重要なものである。
- ・肘関節は食事や着替え・排泄の衣類の上げ下ろしの動作に関係しているため、食事・更衣・排泄介護の手間を判断するのに必要な情報である。身体機能としてできないのか、機能の低下はないが意欲低下などでできないかは、手間の問題とケアプランにとって必要な情報である。

2.拘縮(足関節)

[項目は必要である]

- ・立ち上がり、歩行などADL全般に係わる項目であり、拘縮(足関節)の有無によりケアプラン全般に影響する。
- ・歩行、立位、座位の状況を反映する状態像であるため、能力として歩けても、歩いていなければ、拘縮は起こる。その状況を反映するために必要である。

- ・足底が床につくか否かは、安全に移動が出来るかどうかにつながる重要な項目である。
- ・「拘縮（肘関節）」と同じく、過去の改定により「片手胸元持ち上げ」が廃止され、上肢の可動域を表す調査項目は本項目と同拘縮調査項目の肩関節しか現存しない。推計ケア時間に対しての寄与率は低いかもしれないが上下肢の可動域を視るということは調査対象者の全身状態を捕まえることにつながり、ケアプラン作成上の情報としても重要なものであると考える。
- ・足の拘縮があるかどうかは、踵をつけた立位がとれるかどうかに関係するため、歩行介助・排泄介助・移動・移乗の手間を判断するのに必要な情報である。

3.じょくそう

[項目は必要である]

- ・じょくそうの有無は、ケア状態を反映する。心身の状況が急激に悪化してできているのかどうか、あるいは必要なケアが提供されていないかを反映する項目である。
- ・要介護高齢者では、要介護度の軽度、重度にかかわらず、じょくそうはみられる。じょくそうについての情報が得られないと対応できない。
- ・介護放棄の発見につながる（寝かせきり、排泄ケアがされていない等）
- ・じょくそうの処置をするかどうかだけでなく、栄養状態や一般状態に関係する項目なので、食事・飲み込み・排泄などの手間を判断するのに必要な情報である。じょくそうがある場合できるだけこまめな排泄交換を行うことや、排泄の自立を目指すため定期的なトイレ誘導などが必要であり、介護の手間は増える可能性がある
- ・現行選択肢の判断基準において「じょくそうの大きさ、程度については問わない」「実際に薬の塗布や包帯交換が行われなかった場合も含まれる」とされているため、じょくそうがあることについての介護の手間自体が実態と乖離して生じてしまうことが本質的な問題であるとする。項目を削除するよりも、じょくそうによる介護の手間をどのようにとらえるのかという判断基準を吟味することが必要と考える。

4.皮膚疾患

[項目は必要である]

- ・「じょくそう」と同じであるが、利用者の心身の状態が急激に悪化している、または必要なケアが提供されていないかを反映する項目である。
- ・感染症か否か、医療へつなげていくための判断基準となる。本人の訴えがない場合は特に重要であり、在宅サービス利用時には欠かせない項目である。
- ・「じょくそう」と同様、水虫や開放創などについての介護の手間についての判断基準の吟味

の問題と考える。

[項目は不要である]

- ・皮膚疾患の有無は直接介護の手間とならない。かきむしることや薬を塗布する手間がある場合は、指示への反応などに記入していくことも考えられる。

5.飲水

[項目は必要である]

- ・飲水は人間が生きていくのに必要なものであり、自分でできなければ介護項目に必須とされるものである。
- ・自発的に飲水が可能か否かは、行動力、判断力の目安となる。在宅サービスのケアプラン、サービス利用量に関わってくる。独居などの場合は、ケア上の重要な留意事項である。
- ・認知症の進行状況の判断の1つになる項目である。
- ・水分補給の状況は食事摂取と同じように飲み込み機能にとって大切な項目であり、身体機能の低下の程度を判断するのに必要な項目となっている。ただし、判断基準を記載しているマニュアルが細かく記載が難しい。
- ・生命維持のための水分補給についての能力を調査することが本来の目的であろうと考える。たまたま判断基準の中で手段的な説明を記載したことにより、より判断を難しくしてしまったものと理解している。在宅の介護状況や環境要因が多様なために判断が困難になった。調査目的と判断基準を再吟味する事により客観性を高めることができると考えるので、削除することは無用である。

6.作話

[項目は必要である]

- ・高次脳機能障害の症状のひとつであり、認知症状や精神症状の状況を反映できる項目である。
- ・作話の有無は、介護者の負担感を図る目安である。削除されると、ケアプラン作成、サービス導入時に見落とす可能性があり、ケア時に混乱を引き起こす可能性が高い。
- ・現実とは違う話をする事で本人や介護者などが混乱することがあるので、認知症のケアをする上では手間がかかる項目である。

[項目は不要である]

- ・何を作話として定義するかが曖昧である。こうしたことが在宅介護を困難にしてしまうことはあり得るが、どれくらい客観的に困難なものなのか判定することは難しいことと考える。調査項目としての必要性は低いと考えるが、認知症の周辺症状をストーリーとして記載できる特記事項がなくなってしまうことは、多様で把握しにくい認知症介護の困難さを表現する

うえで問題と考える。このため、調査項目としては削除してもかまわないが、他の7群削除項目共通の問題として、BPSDとそれに対する介護の手間を記載しやすい形で工夫した書式を別に作ることを提案する。

7.幻視幻聴

[項目は必要である]

- ・認知症の状態を知る項目として必要、この有無により介護のストレスが異なる。
- ・医療につなぐ必要があるかどうかを問う項目であり、有無を踏まえたうえでの対応が必要になる。
- ・幻視幻聴については、外部からの観察により客観的にとらえることは可能である。推計ケア時間に対する寄与率は低いかもしれないがBPSDを捕らえる事はケアプラン作成上の情報としても重要なものである。

[項目は不要である]

- ・「作話」と「幻視幻聴」は区別がつけづらいため、どちらかの項目で現実とは違う話をつくったり、人がいないのにあたかも人がいるように話をしたりすることを記載していくように改善してはどうか。

8.暴言暴行

[項目は必要である]

- ・認知症の状態を知る項目として必要であり、介護のストレスの度合いにも関連する。
- ・在宅プラン作成に不可欠な必須項目である。また、その原因を探ることで家族関係、ネグレクトなどが分かるケースもある。出現頻度が高い症状ではないだけに、項目にチェックがある場合は重要な情報となる。
- ・認知症の周辺行動の最たるもので、重要な項目である。
- ・インパクトの強い項目であり、実際の様子とそれが与える介護の手間や困難さとの関連が主観的になりやすい項目であると思う。寄与率は低いかもしれないがBPSDを捕らえることはケアプラン作成上の情報としても重要なものである。
- ・周囲の人に対する行為なので、介護が適切に行えないことにもつながるため、「大声を出す」、「介護に抵抗する」という項目同様、日常介護の手間を判断するのに必要な項目となっている。介護に抵抗するのは介護場面でのことになるので、関わりなく暴言を行ったり、原因が分からず突然暴力を振るう場合の記載となると考えられる。

9.大声を出す

[項目は必要である]

- ・認知症の状態を知る項目として必要、大声を出すことにより介護するものが関わるのを控えたりし、必要なケアが提供できなくなる。
- ・常時なのか、どのような場合に起きるのか、把握が必要な項目である。介護者の負担感が大きい症状である。

[項目は不要である]

- ・大声を出すことで周りに対してどれくらいの迷惑を与えることとなり、そのことにより介護の手間や困難さがどれくらい生じるのか、判断が難しい項目であると思う。項目としては削除してもよいと思うが、「作話」同様、BPSDを記載できる書式を工夫して代替えとする。
- ・「暴言暴行」に含めても問題はないと考える。

10. 落ち着きなし

[項目は必要である]

- ・四六時中見守りが必要になり、24時間介護の必要性を表している項目である。
- ・「落ち着きなし」、「外出して戻れない」、「一人で出たがる」はひとつの項目でもよいが、鍵がかかっている施設と違い、在宅ではとても負担になる。

[項目は不要である]

- ・「大声を出す」と同様。落ち着きがないことの客観的程度が推し量りにくいことと、そのことでどれくらいの困難が生じるかは判断が難しいので削除してもかまわないと考える。
- ・「落ち着きなし」の項目と「徘徊する」という項目は記載を分けることが難しい。目的がある場合は「徘徊する」であり、目的がない場合は「落ち着きなし」となっているが、目的自体が介護者に理解できない場合もあるので、この項目は「徘徊する」に含めても問題はない。

11. 外出して戻れない

[項目は必要である]

- ・初期の認知症の方に出現することが多いため、認知症の発現を早期にみつけることができる項目である。
- ・最悪の場合、生死にかかわる重大な項目である。削除の理由がわからない。
- ・「落ち着きなし」、「外出して戻れない」、「一人で出たがる」はひとつの項目でもよいが、出たしまった場合、大きな事故につながる。
- ・具体的には徘徊に関する状況を調査する項目と考える。寄与率は低いかもしれないが、リス

クの高い行動であり、こうしたBPSDを捕らえることは、ケアプラン作成上の留意点として重要なものである。

[項目は不要である]

- ・介護の手間を考えた時、自宅にいる場合と自宅でない場合では、この項目は評価が違ってくる。介護保険サービスを利用することを考えると、この項目で自立になることにより手間が減っているとは言い難いため、削除する必要があると考えられる。

12.一人で出たがる

[項目は必要である]

- ・「外出して戻れない」と同様、「一人で出たがる」ことを防止するため、家族が二重三重に施錠するなどによく見られる。虐待を引き起こす可能性が大きい行動障害を問う項目でもある。
- ・介護者の目を盗んで出てしまう事例などはかなりの手間となっているので、この項目と「徘徊する」という項目で多動かどうかの判断をしている。徘徊と違い、納得しないと興奮して暴力がつながる場合もあるので、認知症への対応としては必要な項目と考える。

[項目は不要である]

- ・「大声」や「落ち着きなし」と同様、BPSDの記載場面で代替することが可能と考える。

13.収集癖

[項目は必要である]

- ・整理ができないのか、ものに固執して捨てられないのか、など精神症状や認知症の状況を勘案できる項目である。
- ・何をどれくらい集めてしまうのかということは具体的な事項であり、客観データとして調査可能であると思う。寄与率は低いかもしれないがBPSDを捕らえることは、ケアプラン作成上の情報としても重要なものであると考える。
- ・在宅において、収集癖は介護の手間としてはかなりの負担となっている。対応ができる施設ケアなどでは特に問題とはならないが、介護保険は在宅ケアが前提であり、介護の手間を判断するのに欠かせない項目である。

14.火の不始末

[項目は必要である]

- ・目が離せない状況となり、介護の量が増加する時の状況である。
- ・「外出して戻れない」と同様、重大な事態を引き起こすことがある。施設であれば、たいていの場合、火に近づく機会はないが、在宅では特に重要な項目である。